

## 第2章 葦山城跡の調査・研究

### 1 葦山城跡の研究史

葦山城跡は近世から伊豆の代表的な戦国城郭として注目されてきた。ここでは、葦山城跡に関する研究・調査、集成本などに掲載された文献等を概観し、時代ごとにどのように葦山城跡が認識されていたか、研究の進展などをまとめる。なお、文献は城跡本体に関するものに限定し、城主の伊勢宗瑞や北条氏規、葦山城を中心とする領国経営、統治構造、武田・豊臣との攻防戦についての研究は、膨大で多岐にわたるため取り上げていない。また、発掘調査に関わる成果は、次節で取り扱う。

#### (1) 江戸時代から第二次世界大戦まで —葦山城跡の位置・曲輪構成・攻防戦—

葦山城跡に関する最初の文献として、公益財団法人江川文庫所蔵の『伊豆国田方郡葦山古城図』を挙げておく(文献1・巻頭図版)。製作は寛政5年(1793)で、葦山城廃城約200年後のようすを描いた絵図である。本城部分と土手和田遺構群が描かれ、堀・土塁・道などが色分けで示されている。また、本城には、北から「三ノ丸」「権現曲輪」「二ノ丸」「本丸」の順に曲輪名が記載され、現在に至る曲輪呼称の元になっている。同じく江川文庫所蔵で、享保年間に描かれた『囲内之絵図』には、「本丸」「外堀」の記載があり、当時の葦山城のようすを読み取ることができる(文献2・第9図)。

秋山富南が寛政年間に完成させた伊豆の地誌『豆州志稿』には、葦山城跡についての詳細な記述がある(文献3)。注目されるのは、葦山城の五口として「蛭嶋口」「和田島口」「十八町口」「一色口」「小田原口」が挙げられていることで、門または外部との交通路を示しているものと思われる。また、宗瑞以前の城主として、田中内膳・外山豊前守の名がある。なお、明治23年(1890)から28年(1895)にかけて、萩原正平・正夫によって『豆州志稿』の増訂がなされた。葦山城跡については、「本丸」「外郭」「内堀」「外堀」などの遺構の遺存状況について追加記述されている(文献4)。

大正7年刊行の『田方郡誌』では、葦山城跡の範囲を示す小字名として、「葦山」「無量寺」「大手」「御座敷」「塩倉」「外池」「芳池」「平山」「天主」を挙げる(文献8)。これらの範囲は、本城と現在認識されている砦群を含む葦山城跡全体をほぼ包括するものである。

このほか、陸軍参謀本部による『日本戦史 小田原役』(文献5)、『郷土史話伊豆半島』(文献6・7)『静岡縣誌』(文献9)、『静岡縣史蹟天然記念物調査報告第二巻』(文献10)などに、葦山城跡についての記述が見られるが、基本的に『豆州志稿』を踏襲したものであり、また、時代を反映してか、武田軍・豊臣軍との攻防戦についての記述が主体となる傾向が強い。

#### (2) 第二次世界大戦後から昭和時代まで —縄張図に描かれた葦山城跡—

昭和39年(1964)に、戸羽山瀬によって2つの論考が『伊豆史談』に掲載された。「葦山城の遺構について」(文献11)では、葦山城跡の構造について、本丸をはじめとする3つの郭から主要部分と、「御座敷(居館址)」「江川郭」「山木出丸」「和田島出丸」等に区分、図に示して防御施設を分析している(第10図)。「葦山城跡防戦」(文献12)では豊臣軍の配置と葦山城の五口を示している。

昭和45年(1970)、東海古城研究会静岡支部の見崎関雄らによって、葦山城跡の縄張図が作成され、同会見学会資料に掲載された(文献16・第11～13図)。縄張図は、本城と土手和田・「天狗岳」江川・和田島の各砦についても描かれ、各々断面図も付されている。これまで各砦の存在は認識されていたが、「出丸」「山上」などの記述であったものの、この文献により、砦に名称が付けられたことになる。なお、

本資料の中では、葦山城は本城のみを指し、「葦山城と城砦群」ととらえている。

なお、昭和55年(1980)には静岡古城研究会による葦山城他の見学会が行われ、見学資料が作成されている(文献19・第15図)。この資料中に、見崎関雄・佐藤郁太による本城部分の縄張図が掲載されており、各遺構の詳細な記述がある。また、本城南端の字「塩蔵」部分の遺構については、仮称としながらも、「南出郭」と位置づけていることは注目される。

昭和40年代から、全国的に城郭を集成したシリーズ本や事典などが次々と刊行され(文献13・15・17・18・35)、静岡県でも地形図・縄張図などが掲載された県内城郭の詳細な集成が行われた(文献14・20)。この中で、『日本城郭大系』(文献18・第14図)・『静岡県の中世城館跡』(文献20)では、昭和45年東海古城研究会資料のとらえ方を踏襲し、葦山城=本城+砦群という記述がされている。

昭和62年(1987)刊行の葦山町史第三巻下資料編に、伊禮正雄<sup>いれいまさお</sup>の論考「葦山城をめぐる若干の問題」が掲載された(文献21・第16・17図)。葦山城跡に関する研究のこの段階での集大成といえるものである。本城部分については各曲輪の規模・形状を、砦群についても詳細な記述がなされている。縄張図や砦の配置図なども示され、葦山城跡に関する基礎資料といえる。なお、町史第三巻には、付図として「葦山城と支砦群の分布」・「天ヶ岳遺構実測図」・「土手和田砦遺構実測図」が添付されており、部分的ではあるが、葦山城跡の測量図が示された。

### (3) 平成時代以降 —多角的な研究・周辺地域への視座—

平成に入って、葦山町史通史編・静岡県史通史編などが刊行された。これら通史編の記述では、葦山城跡を単体の城郭と捉えるのではなく、城下の町・市・交通など周辺部との関わりの中に位置づける視点がみられる。

小和田哲男は、葦山町史通史編において、葦山城跡は山上の曲輪群・砦群・字「御座敷」や芳池地区の居住空間がセットであることを強調している(文献23)。静岡県史通史編では、山家浩樹<sup>やんべひろき</sup>が小田原の海岸線の拠点である「片浦口」の防御を葦山城が担っていたことを文献から明らかにし、小田原との交通に注目した(文献27)。同じく静岡県史通史編で、佐々木忠夫は葦山城が戦時の城、平時の居館であると同時に、伊豆を治める行政府の機能も有していたことを重視した(文献28)。これらの諸研究を総括・発展させたのが有光友學<sup>ありみつゆうがく</sup>である(文献29～31・第18・19図)。有光は小字名や文献、発掘調査から葦山城の武家屋敷地を位置づけ、さらに葦山城跡を取り囲む広範囲に及ぶ城郭関連の小字名を抽出し、「総構」を想定した。また、総構<sup>そうがまえ</sup>内の寺院や町屋で構成される内宿<sup>うちしゆく</sup>(山木・金谷)、総構外<sup>そとじゆく</sup>の外宿としての四日町、職人集落としての奈古谷<sup>なごや</sup>を位置づけ、葦山城下市町の概念図を示した。交通路に関しては、家永遵嗣が、城内に勧請された熊野社と熊野三山との関係、蛭嶋—四日町—西浦—駿河湾のルートなどから、葦山城を太平洋海運の中に位置づけた(文献36)。

昭和60年代からは、葦山城跡の平地部で学校施設等の建替えに伴う発掘調査が行われ、地下に埋没していた堀や屋敷地の存在が明らかになってきた。とくに各地点で検出された障子堀<sup>しょうじぼり</sup>については、齋藤宏が三島市山中城と、望月保宏が小田原城との比較を通じて、年代や機能を考察した(文献24・37・41)。また、池谷初恵は葦山城跡の出土遺物の組成から、各地区の様相を推測し空間構成を推定した(文献38)。

天正18年(1590)の豊臣軍の葦山城攻めについては古くから注目されてきたが、平成に入ってから豊臣軍が築いた付城<sup>つけじろ</sup>の位置・構造を明らかにする研究も進展した。小和田は「天正十八年葦山城籠城覚書」で葦山城側の防備、豊臣軍の包囲の状況を文献や「仕寄陣取図」などから論究し、豊臣軍の布陣図を地図上に復元した(文献25・第21図)。見崎は、天ヶ岳全体を詳細に調査し、主に防衛面からの考察を行っている(文献26・第22図)。土屋比都司は、葦山城東側にある4つの付城、「本立寺付城」「追

越山付城」「上山田付城」「昌溪院付城」の縄張図を示し、天ヶ岳<sup>しより</sup>の仕寄遺構の分析から、豊臣軍との攻防ルートを推定した（文献34・40・第23・24図）。

中井均は毛利家文書の「小田原陣之時韮山城仕寄陣取図」や「韮山城取巻人数書立」などの史料を参照し、現地踏査の成果から上山田付城と追越山付城の概略図を示した（文献39・42、第2章－5第53図）。

最近の山城ブームにより、城のガイド本が多く刊行されている。韮山城跡や付城については、小和田（文献22）、水野茂（文献32）、中井（文献42）、池谷（文献43・44・第25図）がある。また、イラストなどでビジュアルな城の復元を示し、わかりやすく紹介したものとしては、下山治久や中井の『歴史群像』が注目される（文献33・39）。

また、北条氏の通信網・防備体制を実験的に検証する目的で烽火実験<sup>のろし</sup>が行われ、望月保宏により、韮山城跡の地理的な位置づけが検討された（文献46）。

以上のように、韮山城に関する研究は、寛政期から数えると200年以上にわたる。今後は、遺存する遺構の詳細な調査・研究を進めるとともに、周辺の様々な関連資料・史料を再検討する必要がある。また、韮山城跡本体の研究にとどまらず、城下の市・町・総構の問題、北条氏城郭のネットワーク、交通路、付城など、多くの研究課題も指摘されている。同時に、それらの研究成果を市民に紹介し、地域で活用する方向性を模索していくことも求められてくるであろう。（池谷初恵）

表5 韮山城跡に関する文献一覧表（1）

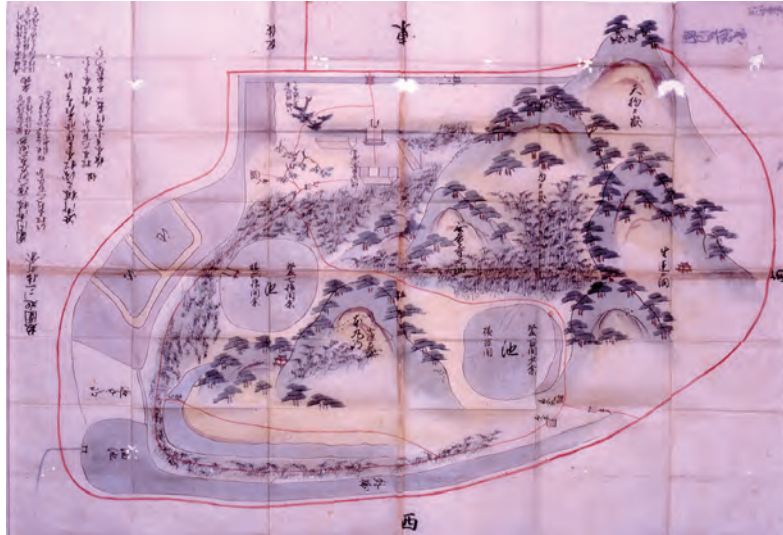
No	西暦	年号	著者	表題	出典	刊行元
1	1793	寛政 5	武田善政	伊豆國田方郡韮山古城図		
2	—	享保年間	(江川英彰)	囿内之絵図		
3	1800	寛政 12	秋山富南	韮山城址（古蹟 田方郡）	豆州志稿	長倉書店
4	1890 ～ 1895	明治 23 ～ 28	萩原正平 萩原正夫	韮山城址（古蹟 田方郡）	増訂豆州志稿	長倉書店
5	1893	明治 26	参謀本部編	韮山城	日本戦史 小田原役	村田書店
6	1913	大正 2	田中義成	北条早雲と韮山城	歴史地理増刊号 郷土史話伊豆半島	日本歴史地理学会
7	1913	大正 2	吉川貞次郎	韮山の籠城	歴史地理増刊号 郷土史話伊豆半島	日本歴史地理学会
8	1918	大正 7	不明	韮山城址	田方郡誌	静岡県田方郡役所
9	1934	昭和 9	不明	韮山城址	静岡縣誌	静岡縣誌編纂所
10	1935	昭和 10	清水吉彦	伊豆韮山城址に就て	静岡縣史蹟天然記念物 調査報告第二卷	静岡縣
11	1964	昭和 39	戸羽山 瀚	韮山城の遺構について	伊豆史談 66号	伊豆史談会・駿豆史談会
12	1964	昭和 39	戸羽山 瀚	韮山城攻防戦	伊豆史談 67号	伊豆史談会・駿豆史談会
13	1967	昭和 42	鈴木健治 小和田哲男	韮山城	日本城郭全集 5	人物往来社
14	1968	昭和 43	横山武男	韮山城	静岡縣城址史	静岡同好通信社
15	1970	昭和 45	大類 伸 (監修)	韮山城	日本城郭事典	秋田書店
16	1970	昭和 45	長倉智恵雄 見崎関雄 望月行男 関口宏行	韮山城とその周辺	東海古城研究会静岡支部 第3回見学会資料	東海古城研究会静岡支部

表6 韮山城跡に関する文献一覧表(2)

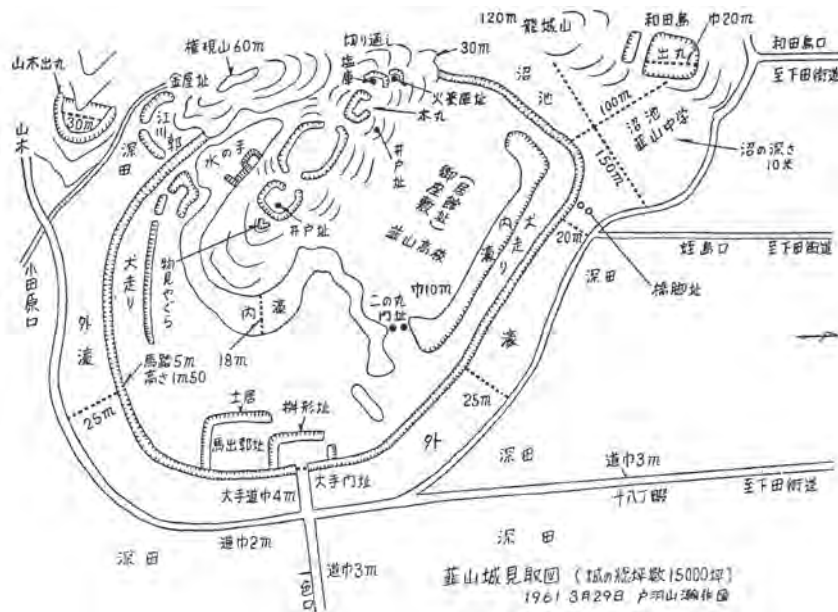
No	西暦	年号	著者	表題	出典	刊行元
17	1971	昭和46	鳥羽正雄	韮山城	日本城郭辞典	東京堂出版
18	1979	昭和54	長倉智恵雄	韮山城 江川砦 天狗岳砦 和田島砦	日本城郭大系第9巻	人物往来社
19	1980	昭和55	見崎闌雄 関口宏行 佐藤郁太	豆州韮山城跡	第58回見学会資料 伊豆韮山城 および江間北条寺と奈古谷国 清寺	静岡県古城見学会
20	1981	昭和56	杉山治夫	韮山城	静岡県の中世城館跡	静岡県教育委員会
21	1987	昭和62	伊禮正雄	韮山城をめぐる若干の問題	韮山町史第三巻下	韮山町
22	1989	平成元	小和田哲男	北条早雲の堀越御所攻め 他	静岡県の城物語	静岡新聞社
23	1995	平成7	小和田哲男	早雲の時代と韮山	韮山町史第十巻通史編I	韮山町
24	1996	平成8	齋藤 宏	北条流築城術の粹 —韮山城と山中城—	韮山町史の栞 第20集	韮山町
25	1997	平成9	小和田哲男	天正十八年韮山城籠城覚書	韮山町史の栞 第21集	韮山町
26	1997	平成9	見崎闌雄	中世城郭&地方史 韮山城群 伊豆・天ヶ岳城 について(中間報告)	古城第43号	静岡古城研究会
27	1997	平成9	山家浩樹	早雲の出自 早雲と足利茶々丸との抗争 韮山城と北条氏規	静岡県史通史編2 中世第三編 第二章第一節	静岡県
28	1997	平成9	佐々木忠夫	韮山城	静岡県史通史編2 中世第三編 第二章第二節	静岡県
29	1997	平成9	有光友學	韮山城と武家屋敷 城下町韮山	静岡県史通史編2 中世第三編 第八章第二節	静岡県
30	1998	平成10	有光友學	韮山城砦と総構・内宿	古代中世の社会と国家	大阪大学文学部 日本史研究室
31	1998	平成10	有光友學	韮山城下市町の様相	中・近世移行期の西国と東国 における村落に関する比較研 究	静岡大学人文学部
32	1998	平成10	水野 茂	韮山城(上・下)	ふるさと古城の旅	海馬出版
33	1998	平成10	下山治久	後北条氏にみる戦略的城郭 配置 戦国支城ネットワーク	歴史群像 1998年夏▶秋(8月) 号	学習研究社
34	1999	平成11	土屋比都司	小田原の役韮山城攻めと その陣城について	古城第45号	静岡古城研究会
35	2000	平成12	西ヶ谷恭弘	韮山城	定本日本城郭事典	秋田書店
36	2000	平成12	家永遵嗣	北条早雲研究の最前線	奔る雲のごとく—今よみがえ る北条早雲—	北条早雲フォーラム 実行委員会
37	2000	平成12	望月保宏	「龍城山」とその周辺につ いての歴史的考察 —最新の調査の結果から—	龍城論叢第20号	静岡県立韮山高等学校
38	2005	平成17	池谷初恵	中世韮山の様相—陶磁器・ 土器の分布から—(論考編) 韮山城跡(資料編)	陶磁器から見る静岡県の 中世社会—東でもない西でもない—	菊川シンポジウム 実行委員会

表7 韮山城跡に関する文献一覧表(3)

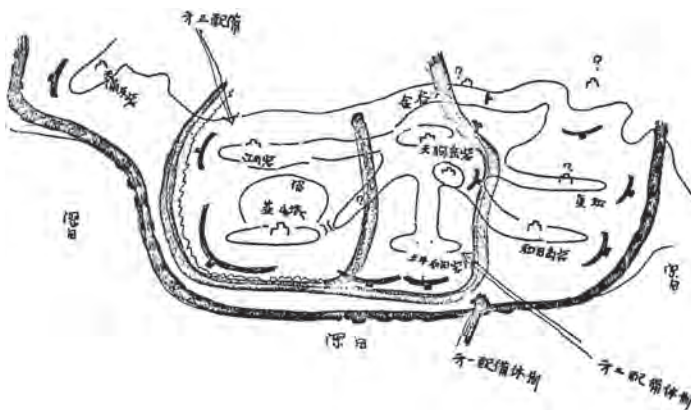
No	西暦	年号	著者	表題	出典	刊行元
39	2006	平成 18	中井 均	韮山城包囲戦	歴史群像シリーズ『戦国の堅城Ⅱ』	学習研究社
40	2007	平成 19	土屋比都司	伊豆韮山城とその付城・仕寄について	古城第 52 号	静岡古城研究会
41	2008	平成 20	望月保宏	韮山城における「障子堀」遺構について	古城第 53 号	静岡古城研究会
42	2009	平成 21	中井 均	上山田城	静岡の山城ベスト 50 を歩く	サンライズ出版
43	2009	平成 21	池谷初恵	韮山城	静岡の山城ベスト 50 を歩く	サンライズ出版
44	2010	平成 22	池谷初恵	北条早雲と韮山城	鎌倉幕府草創の地 —伊豆韮山の中世遺跡群—	新泉社
45	2010	平成 22	池谷初恵	伊豆・東駿河の城郭	小田原北条氏の城郭 —発掘調査にみるその築城技術—	東国中世考古学研究会
46	2011	平成 23	望月保宏	後北条氏の烽火による通信網について —天正期の伊豆西北海岸を中心に—	静岡県の歴史と文化	静岡県の歴史と文化研究会



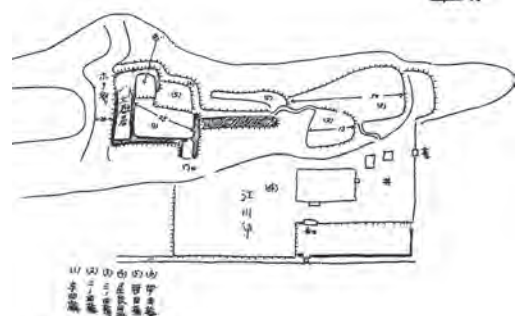
第9図 囿内之絵図 (文献2)



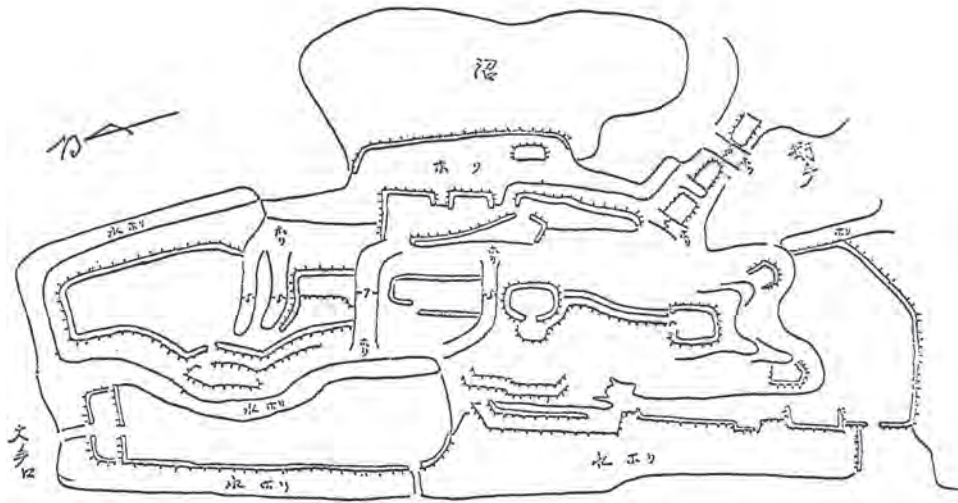
第10図 葦山城見取図 (文献11)



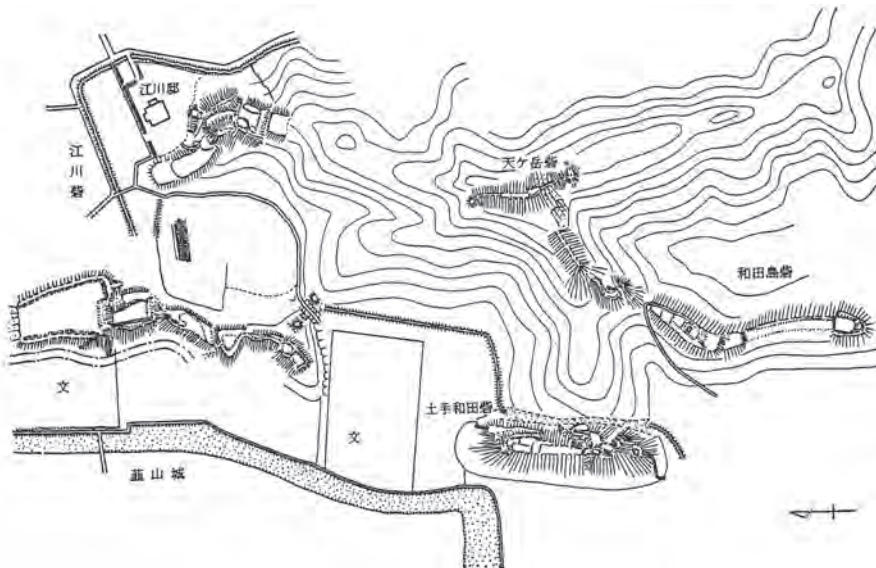
第11図 葦山城と城砦群 (文献16)



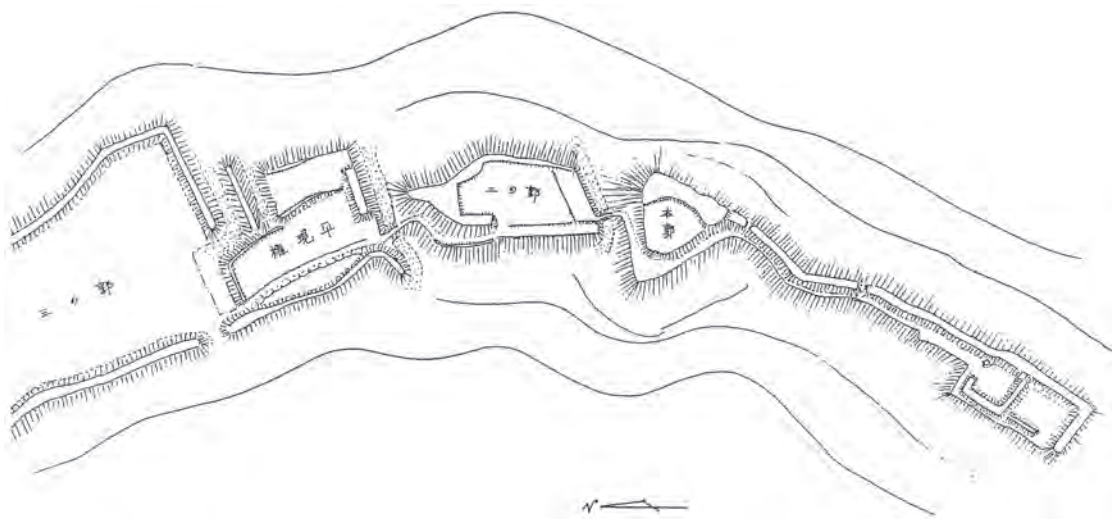
第12図 江川砦繩張図 (文献16)



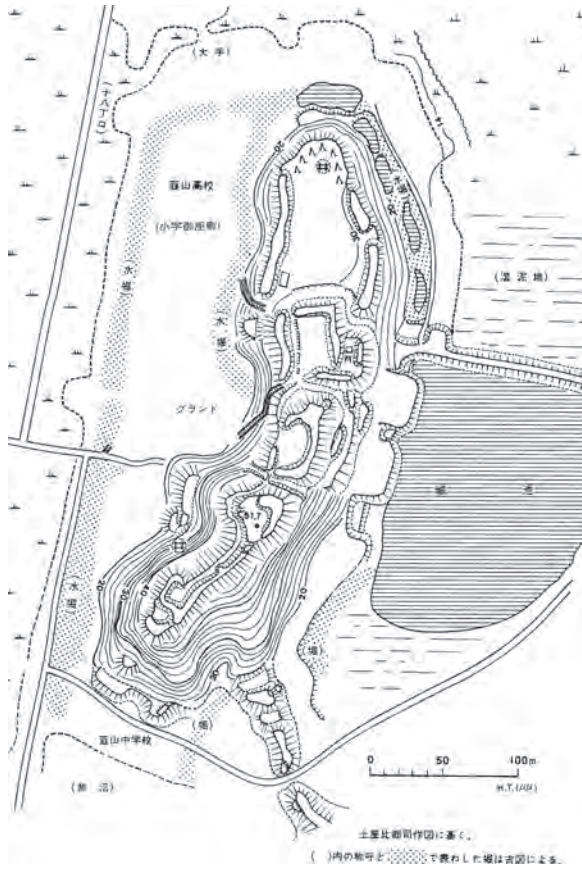
第13図 葦山城縄張図 (文献16)



第14図 葦山城付近城砦分布図 (文献18)



第15図 葦山城縄張図 (文献19)



第16図 葦山城遺構見取図 (文献21)



第17図 葦山城遺構見取図 (文献21)



第18図 葦山城砦と総構・内宿 (文献30)



第19図 葦山城下町概念図 (文献31)

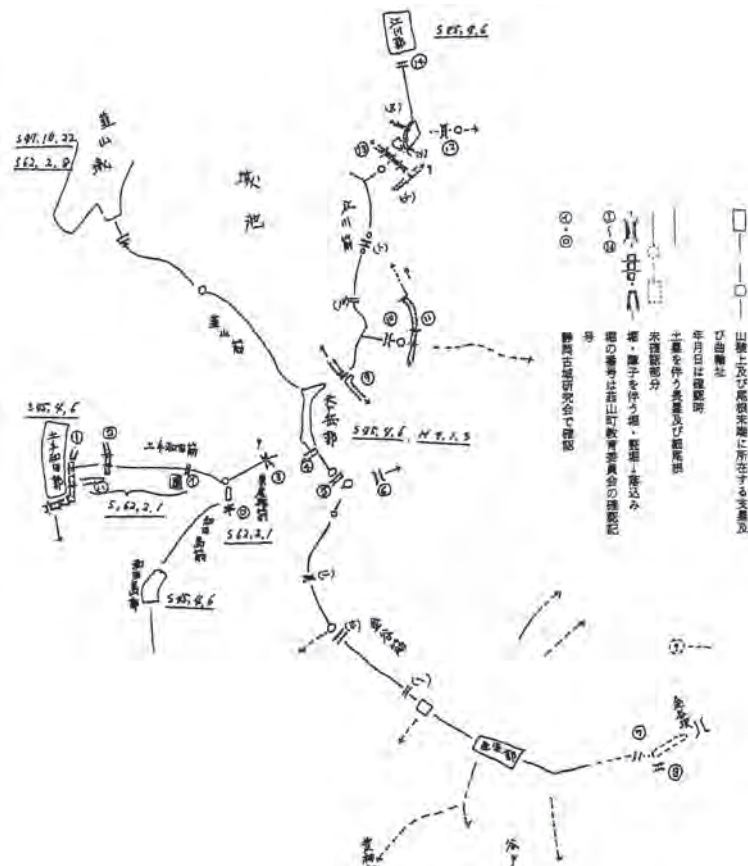




第20図 小田原陣之時葦山城仕寄陣取図模式図  
(山口県文書館所蔵 静岡県史資料編8 より掲載)



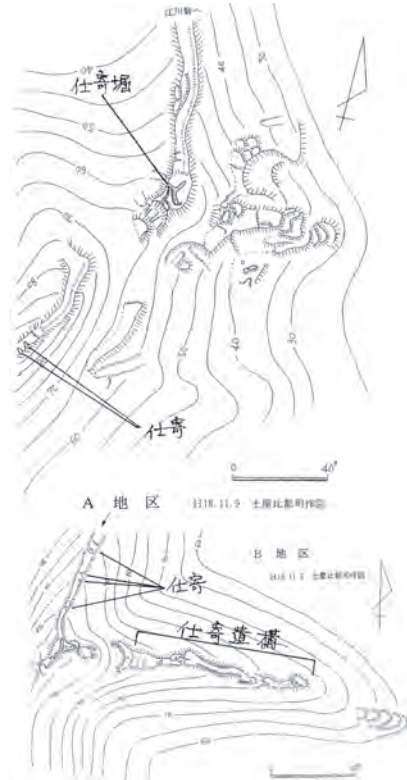
第21図 葦山城攻の豊臣方布陣図 (文献25)



第22図 天ヶ岳城展開図 (文献26)



第23図 天ヶ岳への豊臣方進攻と北条方の退去図  
(文献40)



第24図 天ヶ岳仕寄遺構 (文献40)



第25図 蕪山城を囲む堀跡と  
城関連字名 (文献44)

## 2 葦山城跡の発掘調査概要

### (1) 発掘調査地点の概要

葦山城跡では、これまで21ヶ所で発掘調査が行われている。多くが本城である龍城山の周辺で、特に西側・南側の学校施設建て替えなどに伴う調査が多い。調査主体は、旧葦山町・伊豆の国市・静岡県教育委員会・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（現静岡県埋蔵文化財センター）である。これまで旧葦山町・伊豆の国市が行った調査では、葦山城跡内の小字ごとに地点名・調査次を付けてきた。一方、静岡県教育委員会・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では、「葦山城跡Ⅰ」「同Ⅱ」として報告書を刊行している。ここでは、旧葦山町・伊豆の国市の表記に従い、小字名ごとの地点名に統一する。したがって、県の3件の調査は御座敷第1～3地点となる（註1）。以下、地点ごとに調査地点の概要を記す。各地点の調査内容は表8・9に、位置は第26図に示した。

#### 【御座敷地点】

御座敷地点は、本城北西～西側部分で、葦山高等学校の敷地にほぼ該当する。いずれも学校施設に係る調査で、御座敷第1地点は校舎、第2地点はプールの建て替えに伴う調査で、比較的広い面積の調査が行われた。堀・井戸・園池遺構・道状遺構・石積み遺構などが検出された。第3地点は夜間照明建設のため、5×5mのトレンチ5ヶ所、2×2mのトレンチ5ヶ所の調査が行われた。そのうち、2ヶ所のトレンチで堀・井戸が検出された。

#### 【外池地点】

外池第1地点は御座敷地点の西側で、同じく葦山高等学校敷地内である。講堂建設のため発掘調査が行われた。調査区ほぼ全面で堀が検出された。堀は3時期にわたり重なって構築されており、そのうち2時期のものは障子堀であった。

#### 【大手地点】

大手第1地点は、学校施設建設のための確認調査で、2本のトレンチにより、遺構の遺存状況を確認した。大規模な堀と、堀を埋めた盛土層の上から、かわらけ廃棄土坑が検出されている。遺構の遺存状態が良好であったため、この地点の施設建設は中止され、遺構は保存されている。

#### 【天主地点】

天主第1地点は、平成23年度に実施した城池から本城に登る階段改良工事に伴ない、遺構の状況把握のために行ったトレンチ調査である。5ヶ所のトレンチいずれにおいても、近世・近代以降の盛土層が厚く堆積しており、中世に遡る遺構面は確認できなかった。

#### 【芳池地点】

芳池地点は、本城南側の葦山中学校の敷地およびその周辺部で、学校施設の建設・建て替えや個人住宅建設等に伴ない、計7地点で発掘調査が行われた。第1地点では水路や溝で区画された屋敷跡が検出されている。この調査は中学校のテニスコート建設のための事前調査であったが、良好な屋敷跡の遺構が明らかになったため、建設を中止し保存することとなった。そのため、調査は途中で中止され、全面調査には至っていない。当地点の屋敷地の全容解明は今後の調査に委ねられることとなった。

第1地点の北側に位置する第4地点では、斜面を切り屋敷地の造成を行った様子が明らかになった。第1地点ほど明確な屋敷跡は捉えられなかったが、溝や石の砌の区画が検出されている。

一方、その北側の第7地点、芳池地区南部の第3地点では、中世の遺構・遺物は非常に希薄であり、土層の堆積状況から、中世にはこの付近は低湿地に近い状況であったと理解された。芳池の地名の由来となった池もしくは湿地帯は、中世には寛政絵図よりさらに山際までも広がっていた可能性がある。

## 【無量寺地点】

無量寺地点は、城池の東側、江川遺構群<sup>えがわいこうぐん</sup>の麓に位置する。平成5年度から平成6年度にかけて、城池親水公園整備に伴う関連施設建設のため、3地点4ヶ所のトレンチ調査を行った。調査面積が狭かったため、明確な建物遺構等を把握することはできなかったが、柱穴や溝が多数検出され、遺物も多く出土していることから、芳池第1地点同様の屋敷地であった可能性が高い。

## 【盲女島地点】

盲女島地点は用水路の改良工事に伴って、細いトレンチ調査を3年にわたって行った。江川遺構群の北側にあたるが、江戸時代には葦山代官役所の敷地に隣接した地点のため、近世の遺物が主体で、中世の遺物は多くはなかった。しかし、少量ながらかわらけ・陶磁器が出土しており、16世紀にこの付近にも葦山城跡に関連する遺構が広がっていたことが確認された。

## 【和田地点】

和田地点は、土手和田遺構群<sup>どてわだいこうぐん</sup>の南側の谷入口部にあり、地区公民館建設の事前調査として発掘調査が実施された。100㎡ほどの狭い調査であったが、ほぼ東西方向の道状遺構が検出された。

## 【松並地点】

松並地点は、現在土手和田集落の乗る微高地上にある。マンション建設のための試掘調査と個人住宅建設に伴う発掘調査が行われた。第1地点は狭い試掘トレンチのみの調査であり、中世の遺物が少量出土したものの、明確な遺構を確認することはできなかった。第2地点では、調査区東側で、堀の法面と思われる落ち込みが確認されたが、狭い調査区であったため、規模や深さを明らかにすることはできなかった。

## 【山木遺跡第17次調査】

葦山城跡の北側は弥生時代から古墳時代初頭の集落・水田遺跡である山木遺跡の範囲が一部重なって広がっているが、山木遺跡の第17次調査において、中世の堀が検出されている。道路改良工事に伴う調査であったため、堀の一部のみの調査であったが、障子堀であることが確認された。寛政絵図には、この場所には堀は描かれていないため、近世には埋没したと思われる。葦山城跡のもっとも外側を巡る堀である可能性が高い。

なお、山木遺跡第17次調査地点南西部の兵衛ノ森遺跡<sup>ひょうえのもり</sup>でも、町施設建設に先立ち昭和55年度に発掘調査を行っている。弥生時代末から古墳時代初頭の遺構・遺物が主体で、中世のものは検出されていない。

また、重要文化財江川家住宅の建造物の保存修理工事に伴ない、「武器庫」・「肥料蔵」・「北米蔵」・「南米蔵」において、トレンチ調査を行っている。調査面積はいずれも狭く、一部の遺構確認にとどまっているが、出土遺物は近世から近代のものにほぼ限られ、中世の遺物は「北米蔵」で15世紀後半の常滑焼の甕が出土したのみである。

## (2) 堀の配置と構造 (第27図～第33図)

葦山城跡では、これまでの10ヶ所の発掘調査地点で堀が確認されている。それらのうち、方向や連続性をある程度確認できた堀を堀1～堀6として第27図に示した。

堀1は、①御座敷第1地点・③御座敷第3地点・⑩芳池第5地点で確認された南北方向の堀で、後述するように、葦山城跡では唯一堀幅や深さ、構築方法などが明らかになっている。堀2は堀1の西側に位置し、④外池第1地点で検出された。詳細は後述するが、3時期の堀が重複して確認された。堀3は本城南端の裾部に沿う東西方向の堀で、⑧芳池第2地点・⑫芳池第6地点で確認された。芳池第2地点の土層断面で確認した幅は約5m、深さは約2mである。堀2と直交するが、連続性や新旧関係など

は明らかではない。

龍城山東側の⑤大手第1地点では堀4と土塁状遺構が確認された(第33図・写真20)。トレンチ調査のため土層断面で確認したのみであるが、堀幅は約5m、土塁状遺構との比高差は約2mであった。また、この堀4を埋めた造成面上で大窯第2段階の丸皿が相伴するかわらけ廃棄土坑が検出されている(写真21)。したがって、堀4は16世紀中葉以前に掘られ、埋められたと理解できる。②御座敷第2地点でも調査区の北東隅で堀の落ち込みと思われる傾斜面を確認した。一部の調査であるため幅や深さはわからないが、仮に堀5としておく。

城の北西部の山木遺跡第17次調査地点では、東西方向に走る堀6が検出されている(第34図・写真22)。上部が削平されていて本来の幅は不明であるが、調査時に確認した幅は約6m、深さは現地表面から約2mである。底には2本の障壁があり、少なくとも3区画であることを確認している。障壁の上端部幅は約40cm、高さは50cmである。寛文7年(1667)の「水論裁許絵図」には、この地点に東西方向の水路が描かれており、「多左衛門水門」という注記がある。

なお、絵図に描かれた龍城山北東部山裾を巡る堀は、東側部分は凹地として現在でも痕跡をとどめており、北側の堀は高校の池として残存している(第27図緑色部分)。また、本城と天ヶ岳との間を区切る3本の堀も現存しており、そのうち最も南側の堀は、生活道路として使われている。

前項で述べたように、発掘調査で明らかになった堀はすべて本城を廻る低地部に掘られた堀である。これらのうち、堀1と堀2について、規模や構築方法を見ていくことにする。

①御座敷第1地点で検出された堀1は、堀幅が最も広い部分で約17mを測る(第28・29図)。深さは、報告書には遺構確認面から2.5mと記されているが、土層断面図では底面が明らかではなく、さらに深い可能性も推測される。法面は緩やかで、東側は2段のテラス状を呈す。また、東側法面には4列の丸太杭列が確認されている(写真15)。丸太の太さは5～10cm、間隔は15～30cmである。さらに東側肩部では、堀に沿うように幅0.9～1.2m、深さ1.2mの溝が掘られ、25cm角の角柱が埋め込まれている。とくに中央部では、角柱の下に礎板として板材が置かれている部分も認められた。さらに東側には、幅1.4～2.0m、深さ50cmほどの溝状遺構があり、ここにも太さ8cm程度の丸太杭が打ち込まれていた。報告書では、この2基の溝状遺構と杭列は「土塀状遺構」の基礎部と推定している。堀の中から出土した遺物はないが、東側法面中段で5個のかわらけがまとまって出土している。16世紀前半から中葉のもので、後述する園池状遺構のかわらけと同じタイプである。堀とそれに伴う土塀状遺構構築時に埋没したと思われる。

堀1の南への連続部分は③御座敷第3地点で検出されている。トレンチ調査で検出面積が狭いため法面の一部のみの確認であったが、土層断面により新旧2時期の堀が明らかになった(第31図)。古段階の堀(第31図下①)から約2m西へ移動し、新段階の堀(同③)がつくられている。この堀は深さ2mまでは確認しているが、底面までは達していない。2段のテラス状を呈し、中断のテラスに幅10cmほどの溝が掘られ、溝に沿って計10cmの丸太杭が20cm間隔で打たれている。土層断面では、新段階の堀の法面内側に幅1.5m、深さ1mの溝が検出され、溝底に石を敷き詰めている状況がみられた。溝中にはとくに大きめの石を90cm間隔で据え、その上に23cm角の角材を立てている。その西側は大小の石を乱雑に約70cmの高さまで積み、東側の上部は丁寧な版築が認められた。古段階の堀を埋め、新段階の法面・土塁の基礎となる造作が詳細に確認できた(写真18)。

⑩芳池第5地点で検出した堀1は、西側が調査区外のため幅は確定できなかったが、残存幅は4m、深さは現地表面から2.8mであった(第30図・写真16)。堀底には2列の障壁区画があり、障子堀であることが確認された。区画の長さは短いもので1.5m、長いもので3.5m以上、幅は1m～1.8m以上であり、不揃いである。障壁の上幅は30～60cm、高さは20～30cmで、堀底にわずかに立ち上

げた程度である。また、東側法面には「しがら（しがらみ）」が組まれているようすが確認できた（写真17）。しがらは法面に沿って打ち込んだ丸太杭を支柱とし、竹や木の枝などを横に架けてつくられており、縛った蔓も残存していた。堀の上段には、御座敷第1・3地点同様の杭列が並んでいた。ただし、同2地点のような溝状遺構はなく、径50～70cmほどのピットが70～90cm間隔で掘られ、杭が埋め込まれていた点が異なっていた。堀1と交差して水路をともなう石敷き道が検出されたが、堀を渡る橋が架けられた跡は確認できなかったことから、道は堀によって寸断され使われなくなったと推定できる。

以上のように、堀1は標高13～14mの地盤の軟弱な低地に掘られているため、法面の維持や付随する上部遺構の基礎のために、杭や石を用いて様々な造作を施されていることがわかる。また、御座敷第3地点の土層断面により、少なくとも新旧2時期の堀が重複しているとみられる。時期については、後述する御座敷第1地点の園池遺構、芳池第5地点の石敷き道との重複状況により、16世紀中葉以降に構築されたと考えられる。

堀1の西側に位置する堀2は、①御座敷第1地点と④外池第1地点で検出された。御座敷第1地点では東側の法面のみの確認にとどまっていたが、外池第1地点の調査により、全体様相が明らかになり、3段階（堀2a～堀2c）にわたって構築されていることも確認された（第32図）。

本地点は高校の講堂が建っていた場所で、旧講堂建設時に水田を埋めた盛土層が1.5～2.5m堆積し、また旧講堂の基礎杭が遺構面まで達していたため、遺構の遺存状況は良好ではなかった。また、旧講堂建設以前、水田として使われていた段階にも、城の構築層がかなり削平されたようで、調査時に検出されたのは、堀の底部付近や土塁の基底部分にとどまっている。

古い段階の堀2aは、土層で確認できる残存幅が4.5～5.5mで、堀底には4ヶ所の障壁があり、5区画の障子堀となっている。区画の南北長は3.6～11.5mで、不揃いな区画になっている。障壁の上端幅は残存値で40cm～1m、高さは8～20cmである。堀2aの東側には土塁2が築かれ、土塁の根元には一部で杭列が認められた。

次段階の堀2bは堀2aの西側にあり、残存する幅は4～5mで、5区画の障子堀が確認された（写真19）。区画の南北長は4～5.6mで、堀2a同様に不揃いな区画であった。障壁の上端幅は残存値で30cm～2.1m、高さは10～20cmである。また、土塁の痕跡は確認することができず、堀2cによって削平されたと思われる。

最終段階の堀2cは、西側の法面が確認できなかったため全体の幅は不明であるが、17m以上の幅をもつ大規模な堀と想定できる。深さは現地表面より2.2mを測る。東側に土塁1が築かれている。御座敷第1地点で確認した外堀は、この堀2cの段階であろう。

### （3）道路状遺構と石積遺構

本城北部の②御座敷第2地点で石積み遺構と石敷き道が検出されている（第36・37図）。石積み遺構は東西方向30m程で、東側は緩やかなカーブを描き南側の調査区外に続く（写真23）。西側はほぼ直角に南に曲がり調査区外へ延びている。石積みの途切れる箇所が2ヶ所あるが、土層の確認により後世の攪乱ではなく、当初からつくられなかったというのが調査者の所見である。石は垂直に3～4段積まれていたが、西側の南北方向の石積みは1段のみの検出であった。

石積みから北に4m程のところで、敷石が確認された。石積みとほぼ同じ方向で、長さ9mにわたり検出された（写真24）。幅は1.5～2m、石の大きさは7～10cm程度である。側溝は確認されなかったが、石敷き道の可能性が高い。

報告書によれば、土層断面により石積み遺構と石敷き道は同時期ではなく、石積み遺構を破却した後

の盛土と石敷き道が符合すると結論づけられている。しかし、3～4段の石積みが当初の形であり土塁状遺構の基部と捉えれば、石敷き道と同時期という可能性も考えられる。石積み遺構、石敷き道遺構ともに遺物は出土しておらず、時期を特定することはできない。また、石積み遺構とほぼ同方向の杭列が確認されている。報告書では葦山城構築以前の遺構としている。

⑩芳池第5地点では、前述した堀1と直交する石敷き道が検出されている(第30図・写真16)。調査区内で確認された長さは9.6m、幅は南側が調査区外にあるため明確ではないが、4.4m以上になる。拳大こぶしだいから人頭大じんとうだいの石が全面に敷き詰められ、敷石の上には砂質土さしつどが認められた。道の中央には幅1.2m、深さ15～20cmの溝が走り、溝の両側には杭列が検出された。暗渠水路あんきよであったと推測される(写真29)。水路からは、16世紀前半から中頃のかわらけが折敷や箸とともに大量に出土した(写真30)。そのため、この石敷き道を廃して堀1が築かれたのは16世紀中頃以降と推定できる。

⑪和田第1地点では、東西方向の石敷き道と石組み側溝が検出されている(第35図)。石敷き道の石は部分的に認められたのみで、道幅を明確にすることはできないが、4m以上と想定される。側溝は幅80cm、深さ20cmほどで、両側に拳大から人頭大の石が並べられている。かわらけや瀬戸美濃・常滑陶器せとみのとこなめの破片が出土しているが、いずれも小破片であり年代幅もあるため、現時点で遺構の年代を決定づけることはむずかしい。

#### (4) 屋敷地

本城南側の⑦芳池第1地点では屋敷跡が検出されている(第39図・写真25)。トレンチ調査であったため、面的な広がりにはわからないが、70×50mの範囲に10区画程度の屋敷が存在したと推定される。ほぼ全体を調査したひとつの区画をみると、区画の大きさは13×9mで、4×2間の掘立柱建物跡が建ち、井戸やかまど跡も確認された(第38図・写真26)。これらの屋敷は石積みの水路や石積みで区画され、道路とは塀で仕切られていた。このように小規模な屋敷が立ち並ぶこの地区は、家臣団や職人集団の居住域と推定できる。

⑫芳池第4地点では、明確な建物跡は検出されなかったが、区画溝や柱穴列などが検出されている。また、山裾の岩盤を削り平坦面を造成しており、第1地点同様の屋敷地であった可能性が高い。

本城西側の⑭無量寺第1地点地区でも、掘立柱建物跡や溝の一部が検出されている。トレンチ調査のため、部分的な確認であるが、かわらけ、陶磁器、漆器などが大量に出土しており、芳池地区同様の屋敷地があったと推定される。

#### (5) その他の遺構 (園池遺構・井戸・かわらけ廃棄土坑)

##### 【園池遺構】

⑬御座敷第1地点の堀1東側では、園池遺構と推定される窪地が検出された。(第40図)。東西16.5m、南北10mの不整形を呈し、深さは最深部で50cmを測る。底面直上には、白い玉石の集石や偏平な川原石しっくい、漆喰などが認められた(写真27)。覆土中層から上層には陶磁器や大量のかわらけ、陶磁器、箸、下駄、漆椀、木製品などが大量に出土した(写真28)。当初は整備された園池であったものが、最終的にはゴミ捨て場のような状況に至って廃棄されたと思われる。出土したかわらけは16世紀前半～中葉頃までのものが主体であり、園池遺構の廃絶は16世紀中頃と考えられる。また、園池遺構の廃絶が堀1の構築によるものとすれば、堀1の構築時期を16世紀中頃以降と想定することが可能となり、⑩芳池第5地点での所見と一致する。

##### 【井戸】

⑭御座敷第1地点の園池遺構北東側で素掘りの井戸1基が検出された。径2.6～2.7mの円形で、

深さは3 m以上である。上層で漆椀が出土したのみで、時期を決定できる遺物は出土していない。

③御座敷第3地点、高校グラウンドの東隅のトレンチでも石積み井戸が検出されている。掘り方の径は約2.1 m、石積みの内径は1.1 mで、深さ1.8 mのところでは桶状の井戸枠を検出している。深さ2.7 mまで掘り進めた段階で湧水により調査不能となったため、深さは不明である。覆土より15世紀後半に比定される瀬戸美濃の破片が出土しているが、1点のみであり、井戸の時期を確定するには至っていない。

#### 【かわらけ廃棄土坑】

⑤大手第1地点の堀4を埋めた造成面<sup>どこう</sup>で土坑が検出された(写真21・35)。長径約3 m、短径約2 mの楕円形で、深さは20 cmである。200個体以上のかわらけが出土し、大窯2段階の丸皿が共伴している。かわらけはほとんどが完形のもので、使用したかわらけを一度に廃棄した土坑と思われる。これらの遺物の時期から、堀4を埋める造成は16世紀中葉頃に行われたと想定することができ、堀4はそれ以前の遺構と考えられる。

### (6) 出土遺物

これまでの葦山城跡に関連する発掘調査で出土した遺物のうち、土器・陶磁器類について、調査地点・遺物種別ごとの集計表を資料編・資料9に示した。総数は、16,038点(破片数)である(註2)。

遺物全体の組成を見ると(資料9①～④)、遺物が多く出土しているのは、御座敷第1・2地点、芳池第1・4地点、無量寺第1地点である。1 m<sup>2</sup>あたりの出土点数をみると、無量寺第1地点が8.75点、芳池第4地点が11.67点で非常に多い。このほか、御座敷第2地点2.75点、芳池第5地点が4.64点であった。芳池第1地点は1.52点であるが、保存のため下層まで調査していない経緯があり、調査が完了すればもっと多い数値になると予想される。御座敷第1・2地点は、「御座敷」の字名が示す通り、城の主たる居住地のひとつと考えられ、芳池地点や無量寺地点も、屋敷地が想定されている場所であり、これらの地域は出土量が多い傾向が確認できた。一方、外池第1地点・芳池6地点・山木第17次調査地点は堀を検出している地点であり、そのために出土遺物が少ないと考えられる。

いずれの地点も出土遺物の大半はかわらけが占めており、とくに御座敷第1・2地点、芳池第4地点、無量寺第1地点では、90%を超える比率を示している(第41図)。例外は芳池第1地点で、貿易・国産陶磁器の出土量が多いため、かわらけの比率は低く73%である。かわらけの出土量は廃棄土坑など遺構によって大きく左右される場合が多いため、一概に数字だけではいえないが、城域内での位置や機能によって出土量に差が生じている可能性もあり、今後詳細な検討が必要であろう。

陶磁器は産地ごとに形式別の出土量を示した(貿易陶磁：資料9⑤・⑥ 瀬戸美濃：資料9⑦・⑧ 志戸呂・初山：資料9⑨ 常滑：資料9⑩・⑪)。

貿易陶磁の出土量と特徴として、青磁の碗<sup>せいじ わん</sup> B4類・稜花皿<sup>りょうかざら</sup>、白磁の皿<sup>はくじ</sup> C1類、染付<sup>そめつけ</sup>の皿 B1類が多いことを挙げることができる。これは16世紀の城郭関連遺跡に共通する傾向といえる。城の威信財<sup>いしんざい</sup>になる遺物は、天目茶碗<sup>てんもくちやわん</sup>や青白磁梅瓶<sup>せいぱくじめいびん</sup>が少量ある程度で、非常に少ない。ただし、城築城以前の遺物、青磁碗 A・B1類や白磁皿 IX類なども含まれていることに着目すれば、梅瓶も城に伴う遺物ではない可能性もある。

瀬戸美濃については、古瀬戸後期IV新期から大窯段階にかけてのものが主体で、15世紀末から16世紀前半のものが多い傾向がある。器種では、播鉢<sup>すりばち</sup>や皿類が多い。このほか、前述の御座敷・芳池・無量寺地点では、天目茶碗が多い傾向がみえる。出土量の多い御座敷第2地点・芳池第1地点・無量寺第1地点については、第42図にグラフを示した。いずれの地点でも最も出土量の多いのは、古瀬戸後IV新期である。これはこの時期の播鉢が多数出土していることによる。ついで大窯1もしくは3段階のも



のが多く、2段階は減少する傾向がある。また、大窯4段階には激減しているが、志戸呂・初山製品が一定量出土していることから、これらと補完関係にあると考えられる。

常滑は10～12型式（15世紀後半～16世紀代）が主体である。器種では、甕が大半を占め、片口鉢や壺類は少ない。また、3～6型式の製品、渥美の甕など、築城以前の遺物も一定量出土している。

以上のように、現在までの葦山城跡の出土遺物を概観すると、時期的には伊勢宗瑞が築城した時期に先行する15世紀後半を含む16世紀前半にやや偏るものの、器種組成などは該期の城郭遺跡と同様の傾向をとらえることができる。なお、築城以前、とくに鎌倉時代の陶磁器が一定量ふくまれていることには、城の成立以前に関わる問題として、今後検討していく必要がある。

### （7）まとめと今後の課題

以上述べてきたように、葦山城跡では21ヶ所の発掘調査が行われ、堀・屋敷地・園池遺構など、城に関する遺構が検出されている。とくに、堀は10ヶ所の調査地点で確認され、配置などから、現段階では6基の堀と認識した。これらの堀の配置から、本城の東・西・北側は二重、部分的には三重の堀が巡っていたことが明らかになっている。ただし、同じ場所で作り変えられた堀もあり、すべての堀が同時に存在したものではない。時期ごとの堀の配置については、今後の調査が必要となる。また、寛政古絵図とほぼ一致する位置で検出された堀（堀1）や、絵図には描かれていない堀（堀6）などがあり、絵図やその他史料との比較検討も重要となろう。

居住空間については、いくつか推定できる地点が明らかになっている。御座敷第1地点では園池遺構や井戸が検出され、大量のかわらけが出土する状況など、居住空間と推定された。この地点の小字が「御座敷」であることから、その可能性は高いと考えられる。芳池第1地点では、小区画の屋敷割が検出されており、居住空間のひとつと考えられる。芳池第4地点でも平場を造成した跡や溝が検出されるなど、居住地として利用された可能性がある。また、城池東側の無量寺地点でも、大量の遺物が出土している。現在までに想定される居住空間としては、葦山高等学校敷地内・葦山中学校東側の芳池地区・城池東側の無量寺地区の3ヶ所を挙げることができる。

遺物については現在は基礎整理が終わった段階で、調査地点ごとの概略が見えてきたところである。遺物の主体は、どの地点もかわらけであるが、その割合に違いがあることが明らかになっている。また陶磁器は、時期別にみると量の多寡があり、とくに古い時期のものが多く傾向が認められる。

しかし、これまでの発掘調査の目的は学校施設の建て替えなど、いずれも開発に伴う調査で学術目的のものではない。そのため、調査地点に偏りがあり、葦山城跡全体を把握するには至っていない。とくに、調査地点が北側の低地部分に偏っており、本城や天ヶ岳の遺構群については、発掘調査による情報は皆無である。

今後は、調査地点ごとの遺構・遺物整理を進め、地点・遺構の時期や性格を把握する必要がある。それらの成果に基づき、丘陵部の遺構群や南・東部分の低地部などの発掘調査を計画的に行い、葦山城の範囲や遺構の遺存状況、時期・性格などを把握することが求められる。（池谷初恵）

### 註

- 1) 御座敷第2地点（静岡県埋蔵文化財調査研究所1997『葦山城跡・葦山城内遺跡』）は、実際の調査地点の小字は「大手」の範囲である。その後の平成15年度葦山町教育委員会調査地点を、大手第1地点としたため、調査地点名に齟齬が生じている。
- 2) 大手第1地点・天主第1地点は未集計、外池第1地点の瀬戸美濃・常滑陶器は型式分類が未処理である。

表8 葦山城跡発掘調査一覧表(1)

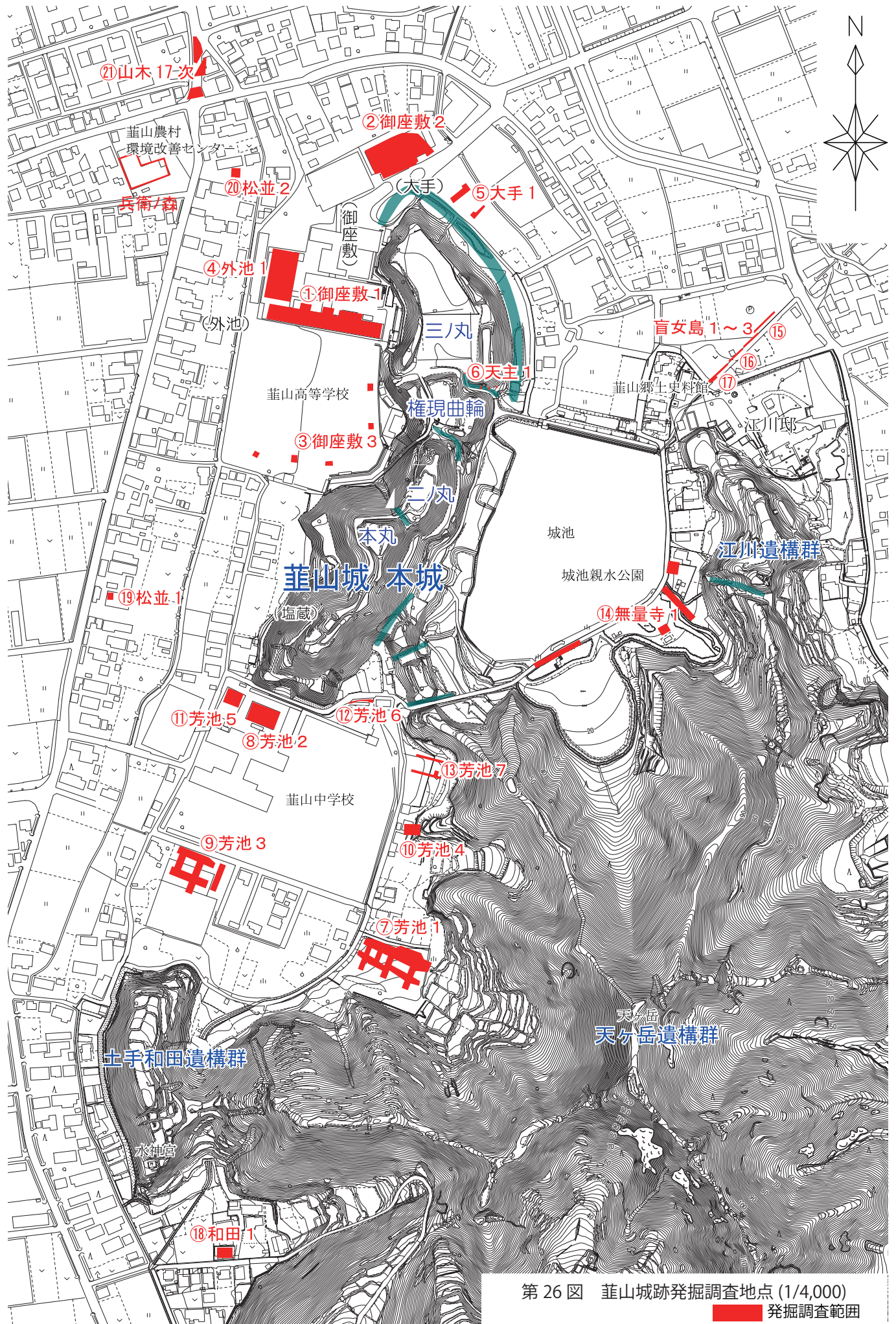
No	地点名	調査年度	調査期間	調査主体	調査目的	所在地	面積	主な遺構	報告書
①	御座敷第1地点 (葦山城跡1次)	平成2年度	1990.8.31～ 1991.3.31	静岡県教育委員会	葦山高校 施設建設	葦山葦山 字御座敷 229	1200㎡	堀・園池遺構 井戸	*1
②	御座敷第2地点 (葦山城跡2次)	平成7年度	1995.4.1～ 10.31	静岡県埋蔵文化財 調査研究所	葦山高校 施設建設	葦山葦山 字御座敷 229 他	1700㎡	堀・石積み遺構 石敷道路	*2
③	御座敷第3地点 (葦山城跡3次)	平成17年度	2005.10.11～ 11.11	静岡県埋蔵文化財 調査研究所	葦山高校 施設建設	葦山葦山 字御座敷 229	145㎡	堀・井戸	*3
④	外池第1地点	平成16年度	2004.4.26～ 11.22	葦山町教育委員会	葦山高校 施設建設	葦山葦山 字外池 316-1 字御座敷 22	1100㎡	堀	*4
⑤	大手第1地点	平成15年度	2003.5.12～ 6.19	葦山町教育委員会	範囲確認	葦山葦山 字大手 157-4	145㎡	堀・土塁 かわらけ廃棄土 坑	
⑥	天主第1地点	平成23年度	2011.8.22～ 8.31	伊豆の国市	遺構確認	葦山葦山 字天主 195	18㎡		
⑦	芳池第1地点	昭和60年度	1985.8.16～ 9.26・10.26 ～1986.5.15	葦山町教育委員会	葦山中学 校施設建設	葦山葦山 字芳池 521 他	1044㎡	屋敷区画・石積 み水路・掘立柱 建物跡井戸	
⑧	芳池第2地点	昭和61年度	1986.7.28～ 9.13	葦山町教育委員会	葦山中学 校施設建設	葦山葦山 字芳池 393	370㎡	堀	
⑨	芳池第3地点	昭和62年度	1987.7.1～ 8.12	葦山町教育委員会	葦山中学 校施設建設	葦山葦山 字芳池 398-1	220㎡	*中世は湿地帯	
⑩	芳池第4地点	平成7年度	1995.5.17～ 7.19	葦山町教育委員会	個人住宅 建設	葦山葦山 字芳池 91・492	88㎡	山裾を造成した 平場・溝・柱穴	*5
⑪	芳池第5地点	平成9年度	1998.2.16～ 7.6	葦山町教育委員会	葦山中学 校施設建設	葦山葦山 字芳池 393	169㎡	堀	
⑫	芳池第6地点	平成11年度	1999.8.24～ 8.31	葦山町教育委員会	道路拡幅 工事	葦山葦山 字芳池 393	30㎡	堀	
⑬	芳池第7地点	平成13年度	2002.1.25～ 2.13	葦山町教育委員会	遺構確認	葦山葦山 字芳池 447・ 448・449	112㎡	溝 *中世は湿地帯	
⑭	無量寺第1地点	平成5年度 平成6年度	1993.6.28～ 10.15 1994.4.1～ 5.10	葦山町教育委員会	公園造成	葦山葦山 字無量寺 13-1 他	513㎡	掘立柱建物跡 溝	
⑮	盲女島第1地点	平成12年度	2001.3.2～ 3.28	葦山町教育委員会	用水路 改良工事	葦山金谷 字盲女島 6-1	54㎡		
⑯	盲女島第2地点	平成13年度	2001.11.27～ 2002.1.10	葦山町教育委員会	用水路 改良工事	葦山金谷 字盲女島 9	39㎡		
⑰	盲女島第3地点	平成14年度	2002.6.14～ 10.10	葦山町教育委員会	用水路 改良工事	葦山金谷 字盲女島 9	23㎡		
⑱	和田地点	昭和60年度	1985.10.14～ 10.25	葦山町教育委員会	公民館 建設	葦山土手和田 字和田 171	96㎡	道路状遺構	
⑲	松並第1地点	平成11年度	1999.10.27～ 10.29	葦山町教育委員会	マンショ ン建設	葦山土手和田 字松並 88	—		

表9 韮山城跡発掘調査一覧表（2）

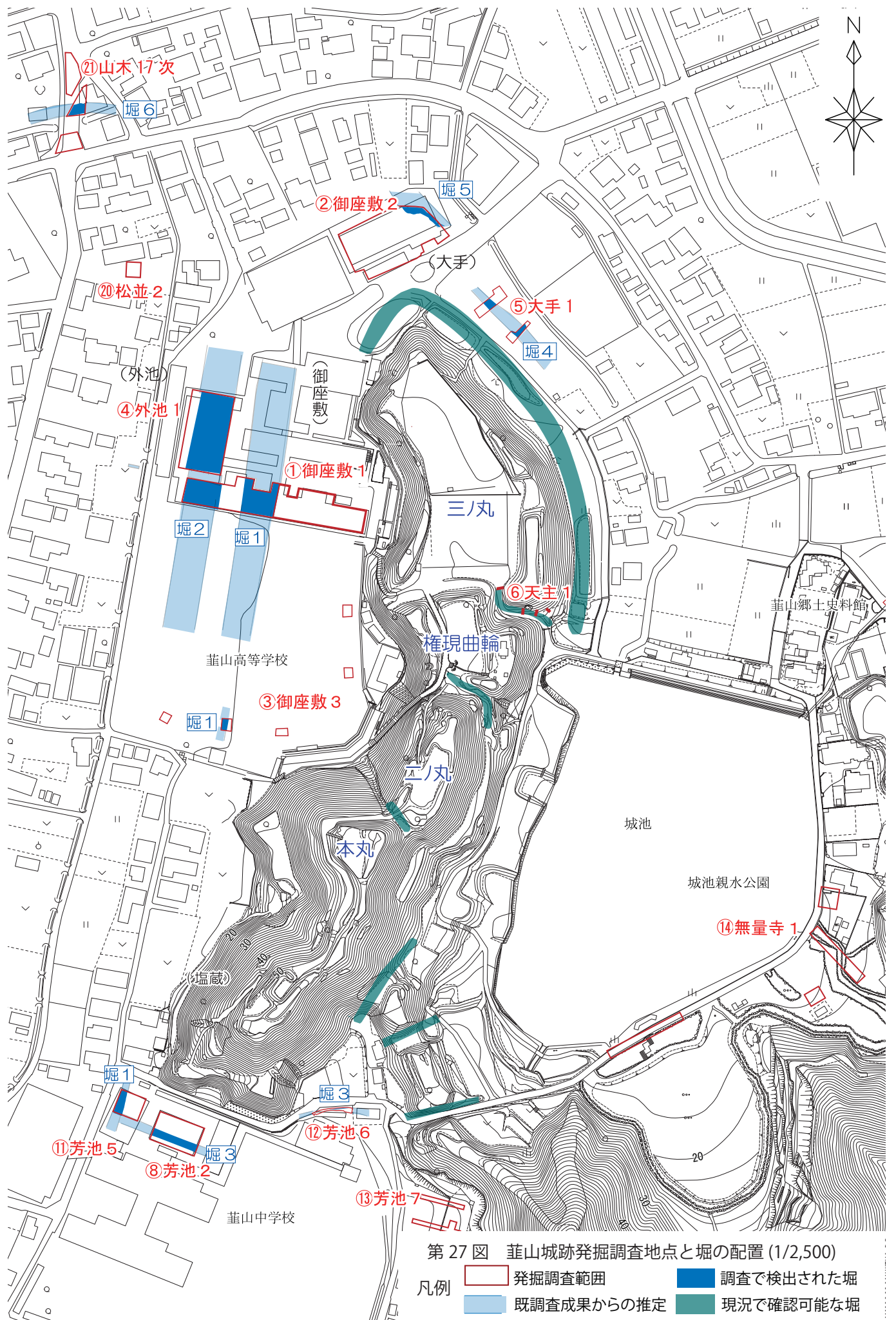
No	地点名	調査年度	調査期間	調査主体	調査目的	所在地	面積	主な遺構	報告書
⑳	松並第2地点	平成13年度	2001.11.7～ 11.26	韮山町教育委員会	個人住宅 建設	韮山土手和田 字松並21	25㎡	堀	
㉑	山木遺跡 第17次調査	平成11年度	1999.12.2～ 2000.3.7	韮山町教育委員会	県道改築 工事	韮山土手和田 字五ツ島10－ 11他	450㎡	堀	*6

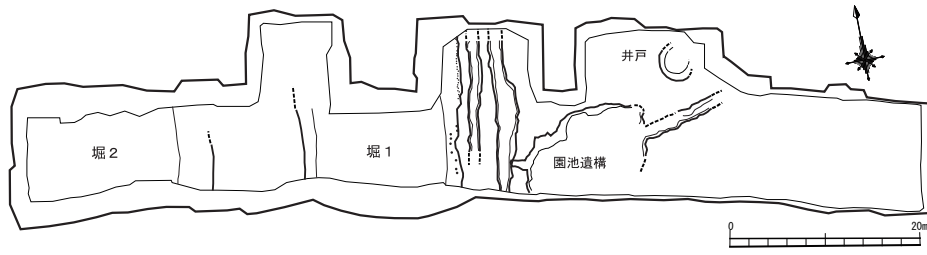
## 刊行報告書

- \* 1 静岡県教育委員会 1992『韮山城跡』
- \* 2 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『韮山城跡・韮山城内遺跡』
- \* 3 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006『韮山城跡Ⅱ』
- \* 4 伊豆の国市教育委員会 2006『韮山城跡 外池第1地点発掘調査報告書』
- \* 5 韮山町教育委員会 1996『平成7年度町内遺跡発掘調査報告書』
- \* 6 韮山町教育委員会 2001『山木遺跡－県道函南停車場反射炉線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

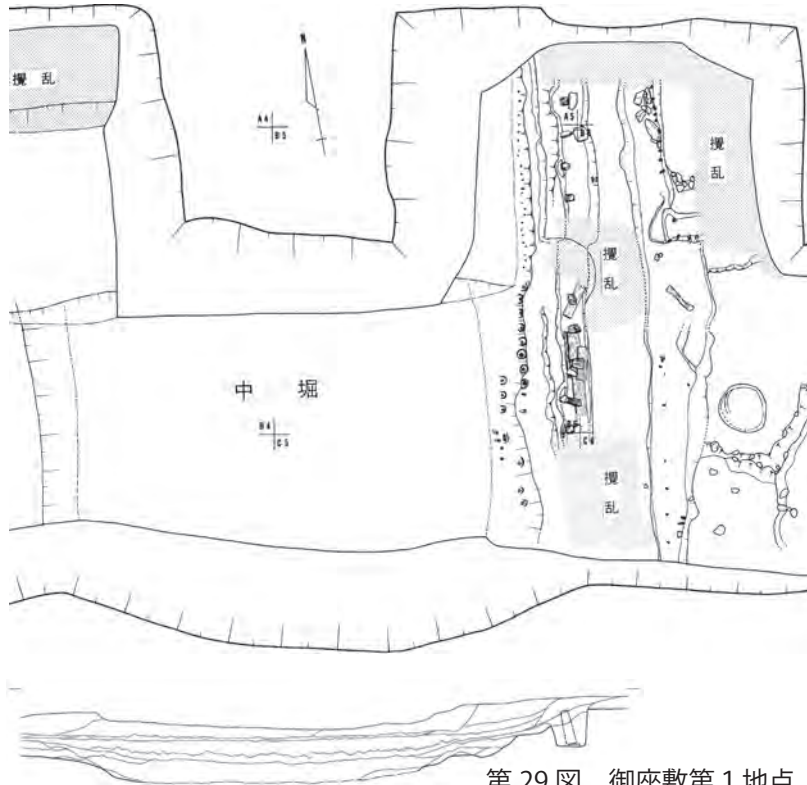


第 26 図 葦山城跡発掘調査地点 (1/4,000)  
 発掘調査範囲





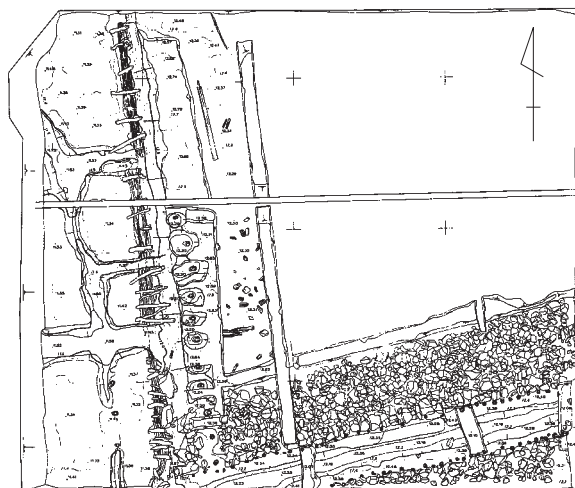
第28図 御座敷第1地点 全体図 (1/800)



第29図 御座敷第1地点 堀1 (1/250)



写真15 御座敷第1地点 堀1 法面



第30図 芳池第5地点 堀と石敷き道 (1/200)

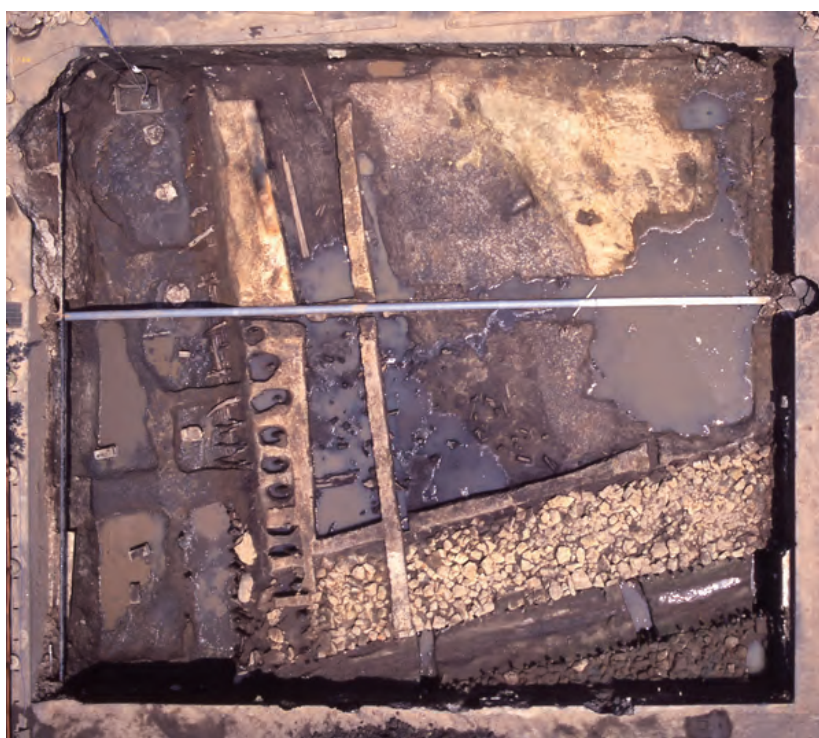


写真16 芳池第5地点 堀と石敷き道



写真17 芳池第5地点 堀法面のしがら



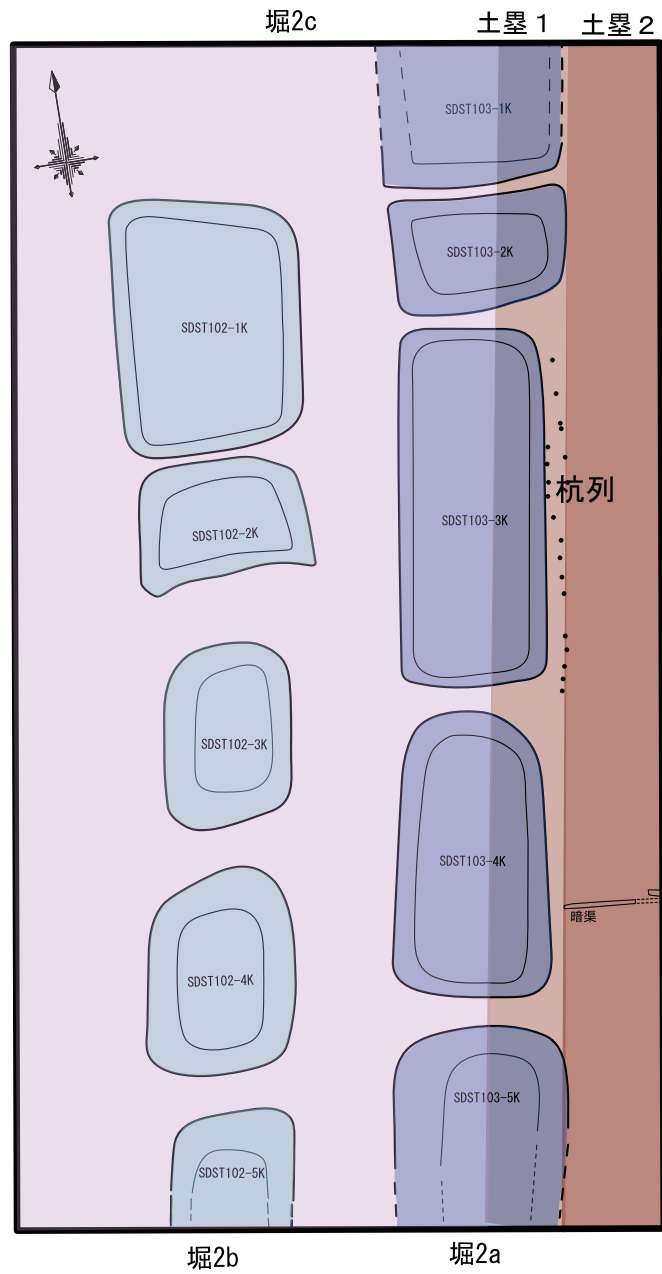
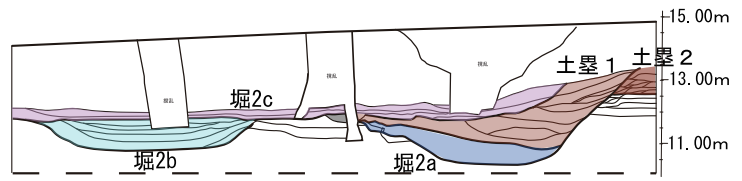
第31図 御座敷第3地点 堀1 (1/120)



写真18 御座敷第3地点 堀1断面

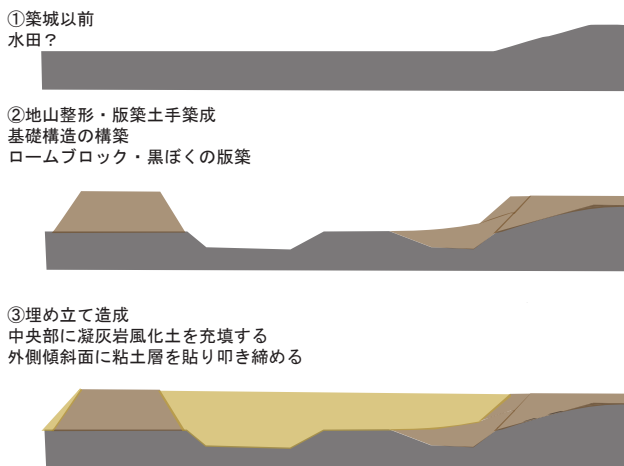


写真19 外池第1地点 堀2b



第32図 外池第1地点 堀2 (1/120)

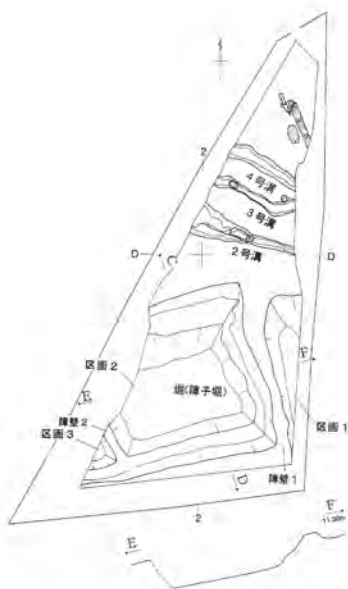




第33図 大手第1地点 堀・造成模式図



写真20 大手第1地点 堀断面



第34図 山木遺跡第17次調査地点 堀6 (1/250)



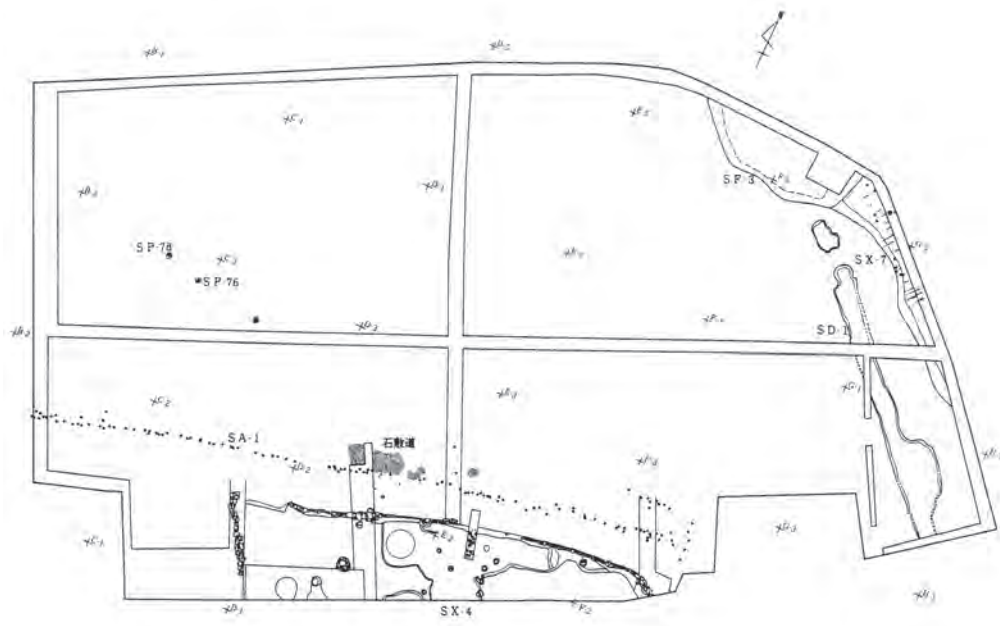
写真21 大手第1地点 かわらけ廃棄土坑



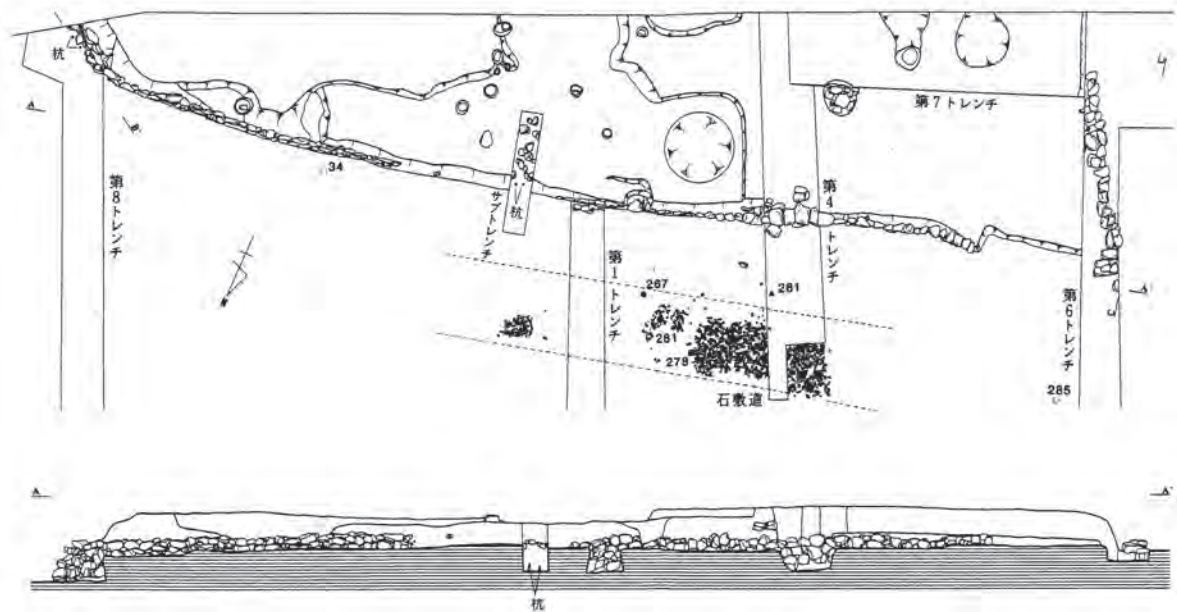
写真22 山木遺跡第17次調査地点 堀6



第35図 和田第1地点 全体図 (1/150)



第36図 御座敷第2地点 全体図 (1/500)



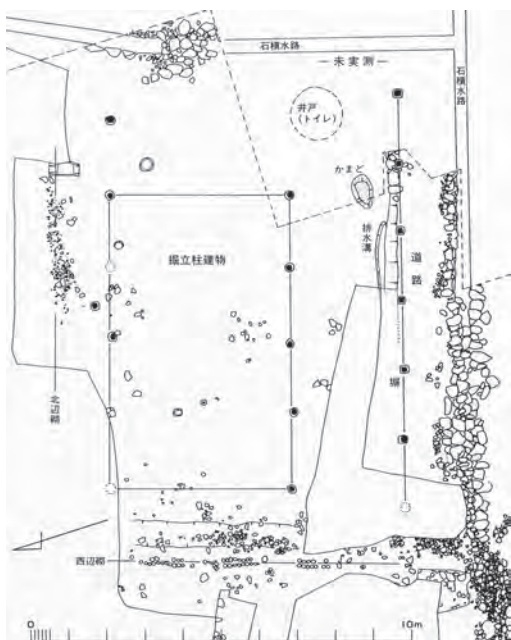
第37図 御座敷第2地点 石積み遺構・石敷き道 (1/200)



写真 23 御座敷第2地点 石積み遺構と石敷き道



写真 24 御座敷第2地点 石積み遺構



第38図 芳池第1地点 屋敷跡 (1/200)



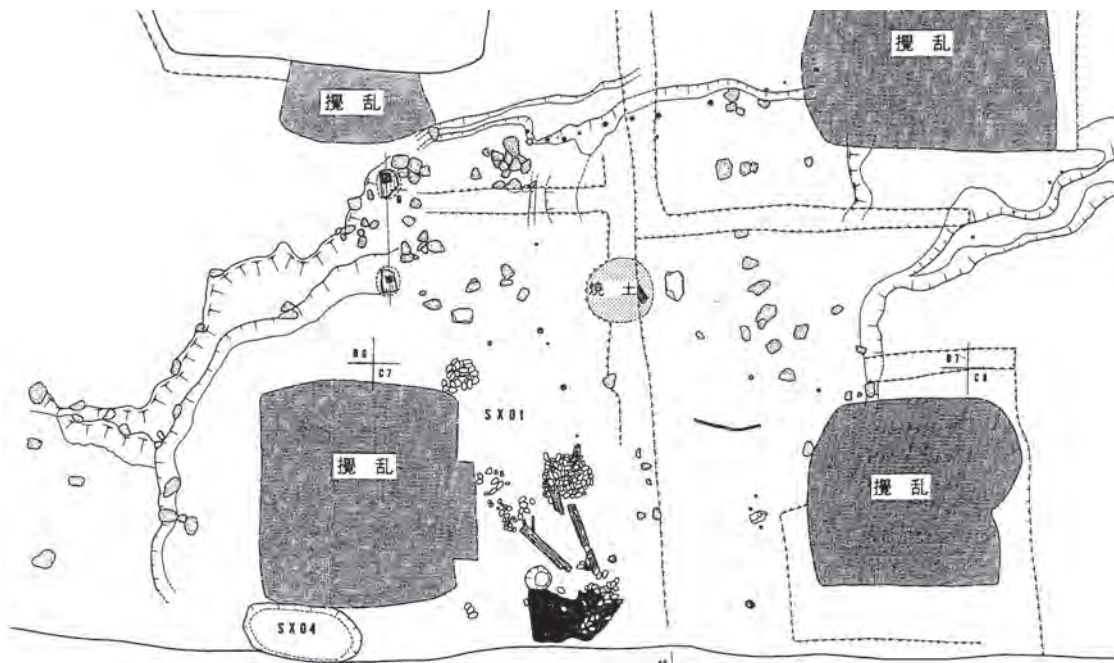
写真25 芳池第1地点 全景



写真26 芳池第1地点 屋敷区画



第39図 芳池第1地点 屋敷跡概念図



第40図 御座敷第1地点 園池遺構 (1/250)

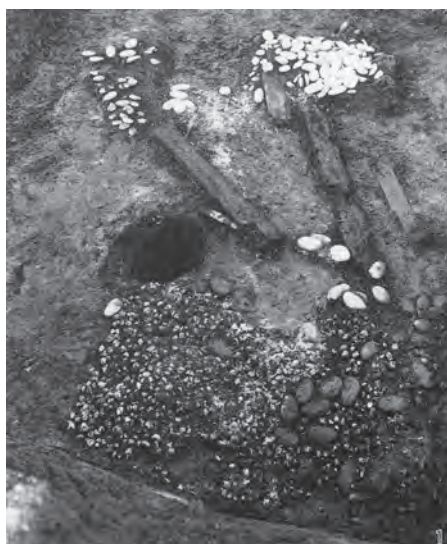


写真27 御座敷第1地点 園池遺構



写真28 御座敷第1地点 園池遺構木製品出土状況



写真29 芳池第5地点 道路状遺構・水路



写真30 芳池第5地点 水路内遺物出土状況



写真31 御座敷第1・2地点 貿易陶磁 (1 青白磁梅瓶 2 染付皿 3 白磁角盃)



写真32 御座敷第2地点 瀬戸美濃天目茶碗



写真33 芳池第1地点 陶磁器

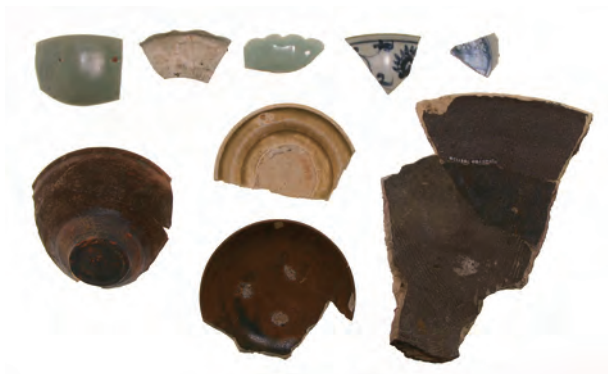
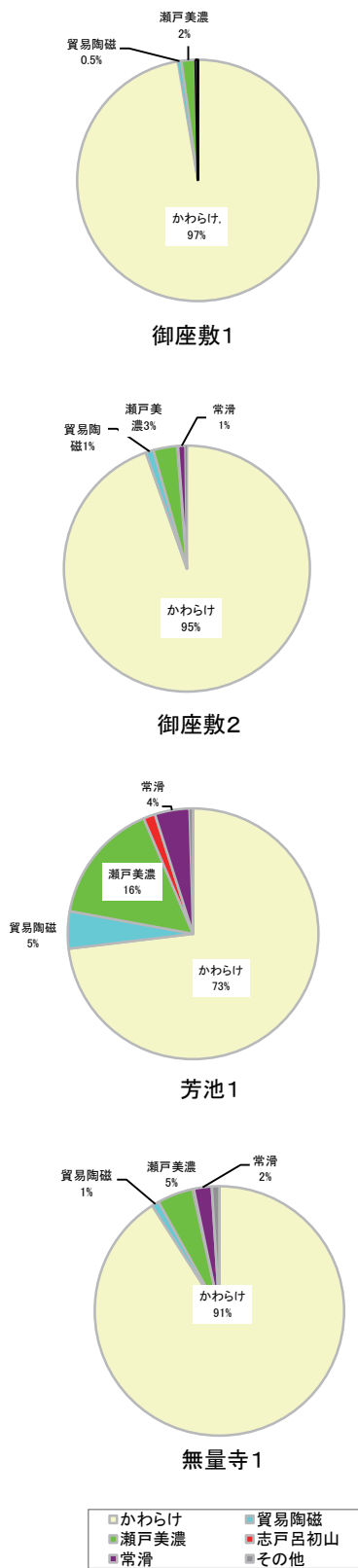


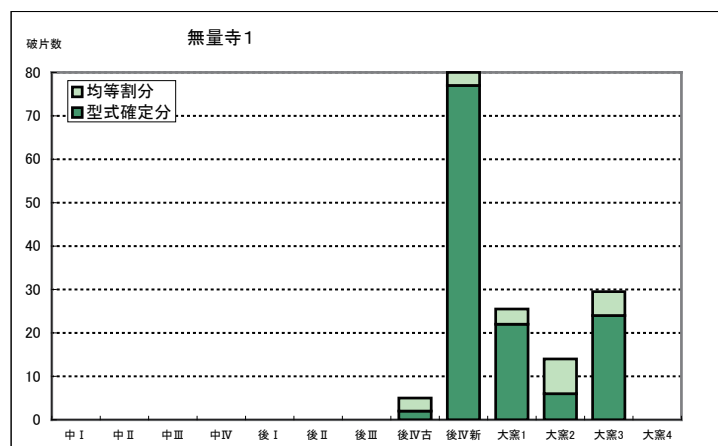
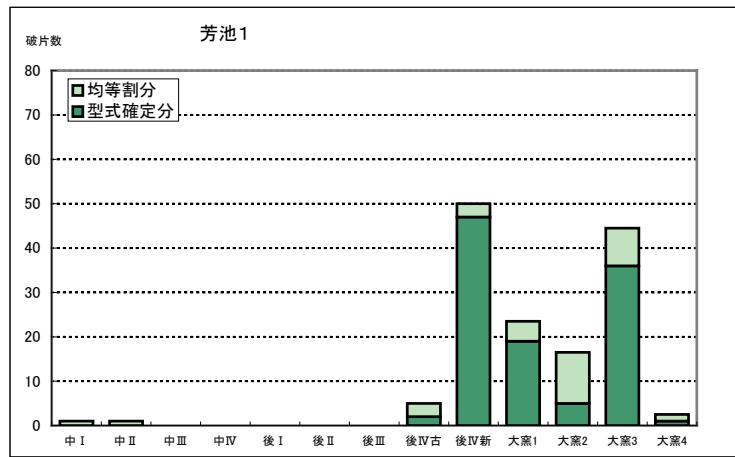
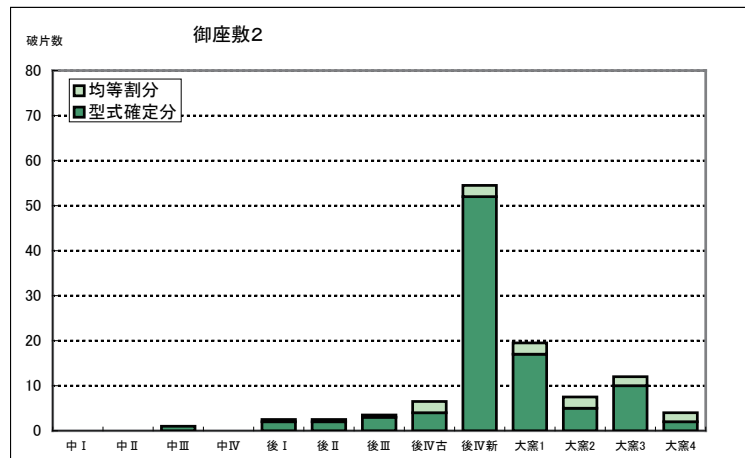
写真34 無量寺第1地点 陶磁器



写真35 大手第1地点 かわらけ廃棄土坑出土遺物



第41図 出土陶磁器・土器組成グラフ



第42図 瀬戸美濃型式別出土量グラフ